ウクライナのディスプレイスト・パーソンを描く―ウクライナ・ロシア系ドイツ語作家ナターシャ・ヴォーディンの『彼女はマリウポリからやって来た』に関して―

徳永　恭子

1.1 移民国家ドイツ

本稿では2018年に出版され、2023年に日本語に翻訳されたウクライナ・ロシア系ドイツ語作家ナターシャ・ヴォーディン Natascha Wodin の小説『彼女はマリウポリからやって来た』*Sie kam aus Mariupol*[1] について考察する。作家の出自、そしてウクライナが描かれていることからも注目を集め、ベストセラーとなったこの小説は、広範囲に渡る家族史を描きあげた自伝的小説である。小説の内容を、マリウポリ、言語、ディスプレイスト・パーソンズという観点から概観した上で、この小説がドイツ語現代文学の中にどのように位置づけられるかを考察する。本論に入る前にまずはドイツにおける戦後の移民の流れ、そして「移民文学」について概観し、ヴォーディンの作家としての位置付けを確認する。

現在ドイツでは5人に1人が「移民的背景」Migrationshintergrund を持つと言われている。「移民的背景」という言葉は漠然と2000年ごろから用いられ始めたが、ドイツが非公式の移民受け入れ国から「事実上の移民受け入れ国」De-facto-Einwanderungsland へと転換した2005年、この言葉が改めて整理されることとなった。ドイツ連邦統計局によると「移民的背景」を持つ市民の定義[2]は「自分自身あるいは少なくとも両親のうちの一人がドイツ国籍を有せずに生まれて来た者」である。さらに追記として「第二次世界大戦の被追放民は（ドイツ連邦被追放民難民法[3]に則り）特殊な地位にあり、彼らとその子孫はゆえに移民的背景を持つ市民には数え入れられない」とされている。つまりこの定義によると、ドイツで生まれ、ドイツ国籍を保有し、ドイツ語を母語並みに習得している移民2世も、両親のうちのどちらかが出生時にドイツ国籍を未所有ならば「移民的背景」を持

---

[1] Natascha Wodin: Sie kam aus Mariupol. Hamburg: Rohwolt 2022（2018）.
『彼女はマリウポリからやって来た』ナターシャ・ヴォーディン　川東雅樹訳　白水社　2023年
本文ではドイツ語原文の引用はS. ページ数とし、日本語訳からの引用は「頁」とする。ヴォーディンは本作で2017年ライプツィッヒの文学賞を受賞した。

[2] ドイツ連邦統計局のホームページを参照のこと　https://www.destatis.de/DE/Themen/Gesellschaft-Umwelt/Bevoelkerung/Migration-Integration/Glossar/migrationshintergrund.html

[3] Bundesvertriebenengesetz（BFVG）1953年施行。東西冷戦中は、東欧、東中欧、南欧出身のドイツ系の人々を「引揚者」Aussiedler として受け入れ、ドイツ国籍を与え、統合する法的基盤となった。

つ者とされる。第二次大戦中にウクライナからドイツへと移住し、強制労働に服した両親を持つヴォーディンは「移民的背景を持つ市民」のカテゴリーには属さない。

ドイツは敗戦後アメリカ軍の指揮のもと、占領した東方地域から連行してきた「東部労働者」に祖国への帰還を強制した。ヴォーディンの両親は戦後もドイツに留まった数少ない例である。戦後の復興経済に湧くドイツは労働力不足に陥ることとなる。大戦で多数の犠牲者を出したことも労働力不足の一因である。当初はソ連占領地区、後の東ドイツから西側へ人口が流入し、西ドイツの労働力不足は補われていたが、1961 年のベルリンの壁の建設は東側からの労働力流入を完全に断ち切った。労働力確保のために西ドイツは南欧諸国を中心として労働協定を結び[4]、ガストアルバイターと呼ばれる労働移民が西ドイツへと移住してきた。ガストアルバイターとは、帰国することを前提とした「ゲスト労働者」という意味であり、この呼称には不景気となると本国への速やかな帰還を願う西ドイツの本音が透けてみえる。実際に 1973 年のオイルショックを契機に「新規募集停止」Anwerbestopp、西ドイツはガストアルバイターの帰国を促進した。50 年代末から募集停止の 73 年まで、実に約 1400 万人の外国人労働力がドイツに入国し、そのうちの約 1100 万人が出身国へ帰って行った[5]。残りの者はドイツに定住し、家族を呼び寄せた。1980 年の外国人労働者の割合としてはトルコ国籍保有者が 33% とトップで、それに続いて 14% のユーゴスラビア、イタリアが 13.9% であった[6]。現在でも「移民的背景」を持つ者の出身国の筆頭はトルコである。2022 年 12 月 31 日時点ではウクライナが 2 位となっている[7]。

1.2「外国人」によるドイツ語文学

外国人労働者を取り巻く社会問題をテーマとした 80 年代の作品群を皮切りに[8]、外国人

---

[4] イタリア（55 年）、スペイン（60 年）、ギリシア（60 年）、トルコ（61 年）、モロッコ（63 年）、ポルトガル（64 年）、チュニジア（65 年）、ユーゴスラヴィア（68 年）

[5] クラウス・J・バーデ / ヨッヘン・オルトマー「ドイツにおける移民の歴史」増谷英樹 / 前田直子訳 『移民のヨーロッパ史　ドイツ・オーストリア・スイス』クラウス・J・バーデ編　東京外国語大学出版会　2021 年　139 頁

[6] 同上

[7] 3 位シリア、4 位ルーマニア、5 位ポーランド、6 位イタリア、7 位クロアチア、8 位ブルガリア、9 位アフガニスタン、10 位ギリシア
https://www.destatis.de/DE/Themen/GesellschaftUmwelt/Bevoelkerung/Migration-Integration/_inhalt.html#sprg251556

[8] イタリア出身のフランコ・ビオンディ Franco Biondi、シリア出身のラフィク・シャミ Rafik Shami は「南風―外国人労働者のドイツ語」Südwind gastarbeiterdeutsch というシリーズを 80 年代に出版し、非ドイツ語話者の作家たちの作品を発表した。また「外国人」ではないが、トルコ人労働者に扮して、ガストアルバイターの労働環境を社会問題として世に問うたヴァルラッフ Günter Wallraff によるルポルタージュ『どん底』Ganz Unten も 85 年に出版されている。

によるドイツ語の文学作品が次々と世に出て行った。そのような非母語話者によるドイツ語文学の展開を後押ししたのは、フランスとドイツの間で引き裂かれたフランス生まれのドイツロマン派の作家の名を冠したシャミッソー賞[9]である。この賞はドイツ語を母語としないにも関わらずドイツ語で執筆活動を行う作家に与えられていたが、2012年には受賞対象の射程を広げ、「文化の変化が刻み込まれた」作品を描くドイツ語作家へ賞が贈られることとなった[10]。これには、「ガストアルバイター文学」から「移民文学」Migrationsliteraturへの変化、壁の崩壊に伴う新たな移民、さらには近年の難民の流入といった歴史の変遷、ドイツ語を母語並みに話すことができる移民2世の活躍などを受けたものだろう。作品の質ではなく、作家の出自というカテゴリーで文学作品を評価しているという批判も受けつつ、シャミッソー賞は2016年[11]、20カ国以上の出身者78人に賞を与え、30年近くに渡る役割を終えて幕を閉じた。

本論で扱うナターシャ・ヴォーディンも1998年にシャミッソー賞を受賞している。彼女はドイツで生まれ、ドイツ語の環境の中で育ったのであり、成人して新たにドイツ語を習得した「移民作家」たちとは事情が異なる。彼女は受賞に関して「とつぜん移民作家になってしまった訳です。あの人たちは私に何をしようというのだろうと考えました。私は移民作家ではないというのに」[12]という発言を残している。

先述した通り、現在では5人に1人が「移民的背景」を持つ「移民国家ドイツ」。ドイツ最大の文学賞ドイツ書籍賞 Deutscher Buchpreis も、オーストリアの文学賞バッハマン賞 Ingeborg Bachmann Preis も、「移民的背景」を持つ作家なしには成り立たない。異文化を体験し、多文化性を孕んだ作品はもはや異質な文学ではなく、それは当たり前、それ

---

[9] この賞は外国人による文学が「ガストアルバイター文学」と呼ばれていた1985年に、ミュンヘン大学の通称ＤＡＦ、「外国語としてのドイツ語」Deutsch als Fremdsprache の中心的人物ハラルド・ヴァインリヒ Harald Weinrich、バイエルン芸術アカデミー、ゲーテ・インスティテュート、ボッシュ財団によって設立された。シャミッソー賞や「移民文学」を巡る詳細な研究としては以下を参照のこと。『ドイツの「移民文学」―他者を演じる文学テクスト』浜崎桂子　彩流社　2017年「移民の背景を持ったドイツ語文学」浜崎桂子『ドイツ語と向き合う』シリーズ「ドイツ語が拓く地平2」井出万秀　川島隆編　ひつじ書房　2020年

[10] ボッシュ基金のHP参照のこと　https://www.bosch-stiftung.de/de/projekt/adelbert-von-chamisso-preis-der-robert-bosch-stiftung

[11] 2016年と2017年はドイツ語圏の異文化への対応という問題を考える上で歴史的な切れ目となる年ではないかと思われる。2016年、オーストリアの大統領選でエコ政党「緑の党」が右翼政党の「自由党」に勝利したが、それは僅差であった。2017年オーストリアでは覆面禁止法 Anti-Gesichtsverhüllungsgesetz が施行され、コロナ禍でのマスク着用の際、障壁となった。ドイツでは2017 年ドイツ右翼政党 AfD が連邦議会進出、ネオナチのシンパ、白人至上主義のドイツ国家民主党ＮＰＤも地方議会進出。

[12]「越境作家ナターシャ・ヴォーディンとの対話」土屋勝彦　Interview mit der interkulturellen Autorin Natascha Wodin. 人間文化研究　第118号　2012年　名古屋市立大学大学院人間文化研究科

こそが「ドイツ文学」そのものの特徴となったのだともいえる。ナショナルな「ドイツ文学」という呼称はもはや無理があり、「ドイツ語文学」という名称こそが、時代と現実に即したものであることは疑いようもない。

2.1 マリウポリに関して

ヴォーディンは戦後間もない 1945 年 12 月ロシア人の父とウクライナ人の母との間にドイツで誕生した。ウクライナのマリウポリに住んでいた父と母はその前年オデッサ港からドイツへと逃れて来た。小説『彼女はマリウポリからやって来た』の「彼女」とは、二度と故郷に戻ることのないままドイツで入水自殺した作家の母のことである。幼くして亡くした母の痕跡を辿る旅が作家と同名の語り手「わたし」によって語られていく。この自伝的小説[13]は母を中心とした祖先の歴史だけではなく、タイトルからも明らかなように、マリウポリの歴史を描くことにも比重が置かれている。母の痕跡を求めることは母の生まれた町の歴史を追うことでもある。10 歳で母を亡くした語り手は母の故郷については何も知らないも同然である。

> そもそもわたしのマリウポリの心象を形作ったのは、子どものころ、ソ連を構成するひとつひとつの共和国に違いがあるとは誰も思わず、十五の共和国の住民はみなロシア人と見なされていたという事実だ。ロシアは中世のウクライナ、つまりロシア文明のゆりかごと呼ばれ、ロシアの都市すべての母であるキエフ大公国が起源であるにもかかわらず、わたしの両親もウクライナをまるで世界最大の国家であるロシアの一部であるかのごとく話した。父は、ロシアはアラスカからポーランドにまで達する、地球の陸地の六分の一を占める巨大帝国だと言った。ドイツなど、それと比べれば地図上の小さなしみにすぎなかった。
>
> わたしの中のウクライナはロシアなるものに呑み込まれていた。マリウポリで暮らしていた若い頃の母に思いを馳せると、背景にはいつもロシアの雪があった。（14 頁、S. 12）

---

[13] 翻訳者の川東雅樹も後書きでこの小説のジャンル分けの難しさについて語っている。「いわゆる自伝とは言えず、もちろん純然たる虚構としての小説であるはずもなく、集めた資料や手記、聞き書きをもとにしているのは確かではあるが、徹底して事実の重みに依拠しているわけではないのでノンフィクションに分類することもできない。刊行後、ドイツ本国で出た書評でもそのあたりは誰もが判断に迷ったらしく、自伝的フィクション（Autofiktion）とか事実小説（Tatsacheroman）などと、まだ十分に認知されているとは言えない専門用語に分類して、困惑をそのまま表しているものもある。」（342 頁）小説の語り手は作家とほぼ等身大であるが、ここでは小説から引用する場合は「語り手」という呼称を使用することにする。

母の記憶を抑圧していた語り手にとって、その町は心の暗部に存在する暗い雪国でしかない。小説冒頭でドイツとマリウポリのサッカーチームの対戦を報じる新聞記事で初めて現実のマリウポリを目にしたことが語られる。重い足取りで凍てつくシベリアの雪の中を歩く母のイメージが、「世界一寒くて暗い土地ではなく、クリミア半島に近い暖かい南の海辺の、ひょっとするとイタリアのアドリア海とよく似た空の下で育った若い娘」の姿へと変わり、「もともと未知だったものが、新たな未知へと変貌した。」（16 頁、S. 13）マリウポリは世界一浅く、温かいことで有名なアゾフ海に面した沿岸都市である。作家の言葉でマリウポリを紹介しよう。「たまたま行き着いたインターネットのサイトで、マリウポリについての新たな事実を知って驚いた。母が生まれたころ、街にはギリシア文化の強い影響がまだ残っていたのだ。十八世紀にエカチェリーナ大帝はここを当時クリミア・ハン国に居住していたギリシア正教徒にあたえた。マリオポリと呼ばれていたこの街に、ほかの民族がふたたび住みつくことが許されたのは十九世紀半ばを過ぎてからのことだった。」（17 頁、S. 14）

小説の語り手だけでなく、日本でマリウポリのイメージを持っていた者は多くはなかったはずである。皮肉にも我々は 2022 年 2 月以来、廃墟と化したアゾフタール製鉄所とともにテレビ画面に映る破壊されたマリウポリの街を見る。2014 年、語り手もテレビ画面越しにマリウポリの破壊を目の当たりにする。マイダン革命から始まった紛争を報じるニュース映像は母の大叔母が設立した学校があった場所を映し出す。その学校はロシア革命で燃え、ナチスドイツ占領下ではドイツの職業斡旋所となり、それもドイツ軍が撤退時に火を放ち、そして警察署に姿を変えた今、再び煙を上げている。

> 少し前までドイツでマリウポリを知る人はほとんどいなかったが、一夜にして紛争がこの街に強烈な光をあてることになった。母のことを考えている間に、テレビが、母の生きていた街を、歩いた通りを、馴染みの建物を、ひょっとしたら当時すでにそこにあったかもしれない小さな公園を初めて映し出した。そしてもうもうと煙を上げて燃え上がるゲオルギエフスカヤ通り六十九番地の、攻撃された時にはマリウポリ警察の本部が置かれていた建物をくりかえし映した。わたしの家族の歴史の中心部が突然、ドイツのテレビニュースのまっただなかに現れたのだ。建物に取り付けられた記念碑版は炎を耐え忍び、そこにはこう記されていた。
>
> 一九四一年から四五年の占領期には当地にドイツ職業斡旋所が置かれていた。ここから六万人以上のマリウポリ市民が強制労働者としてドイツに連行された。十人に一人が隷属状態のなかで命を落とした。（83 頁、S. 86）

マリウポリは1941年ドイツ軍に占領された。スラブ人を追放してドイツ人の生存圏の拡張を目指すバルバロッサ作戦である。大叔母が設立した学校で働いていた母は、その建物が強制労働者を移送する職業斡旋所として使用されることになり、労働者の移送に加担することになってしまう。44年今度はソ連軍がドイツ軍からマリウポリを奪還する。敵国協力者、反ソヴィエトの犯罪者となった母には「ドイツでの強制労働かウクライナでの死かという二者択一」(242頁、S. 257) しか残されていない。間一髪で両親はマリウポリから逃げ出すが、自分たちの意思でウクライナを離れたのか、強制移送されたのかは語り手には分からないままである。二人はソ連軍の爆撃に対する人間の盾として強制労働者が積み込まれた船で、ルーマニア経由でドイツへとやって来る。二度と再び母はマリウポリの街を見ることはなかった。

2.2 言語に関して

ドイツに到着後、両親はライプツィッヒの収容所で強制労働に駆り出され、戦後はニュルンベルクの工場主に匿われて5年間鉄器工場の倉庫で隠れ暮らす。この時に語り手は誕生する。もう少し出生が早ければ「外国人児童保護施設」Ausländerkinder-Pflegestätte、「他民族児童施設」Fremdvölkische Kinderanstalt、「非純血児養護所」Aufzuchtsraum für Bastarde (267頁、S. 284) という名の殺人施設で殺されていた可能性もあったはずである。

水も電気も通っていない工場の錆だらけの倉庫で語り手は幼少期を過ごす。行ってはならないと禁じられた敷地の向こう側の世界へ足を踏み入れるとそこにはドイツの美しい家が並んでいる。聞こえてくるドイツ語を「一言も聞き漏らすまいと未知の言葉に耳を澄ます。それがドイツ世界を、水道の蛇口と電気のある世界を開く鍵になるとそれとなく気づいている。」(290頁、S. 309f.) 工場での潜伏生活がドイツ当局にばれて、ヴォーディン一家は追放流民たちが集められたヴァルカ収容所 Valka-Lager に入所を命じられる。このヴァルカ収容所で初めて彼女は収容所内の学校に通い、「対岸に、ドイツ世界に飛び移るために掴む太い綱」(297頁、S. 317) であるドイツ語を学ぶこととなる。母は娘がドイツ語を使うのを認めず、ロシア語で話しかけてくる。「言語戦争が勃発」(同上) し、語り手も母親のロシア語を拒絶する。父親も最後までドイツ語を話すことはなく、自分で作り上げた小さなロシア世界に留まり続けた。母の足跡を辿るこの小説の続編ともいえる『暗闇の中のどこかで』*Irgendwo in diesem Dunkel* (2018年)[14] は父が物語の中心に据えられ、母を亡くした後の語り手と父の関係が描かれる。「わたし」にとってドイツ語は、暴力的

[14] Natascha Wodin: Irgendwo in diesem Dunkel. Hamburg: Rohwohlt, 2018.

な父に対する反抗の一手段でもある。「わたし」は16歳で家出し、飢えやレイプ、望まぬ妊娠など過酷なホームレス生活を送ったのちに、声の美しさを買われ、電話のオペレーターとして自立する。ドイツ語を使う仕事に就くことで、語り手は長年の夢であったドイツ社会に参入を果たし、両親が体現するロシア世界から決別するのである。インタビューによるとヴォーディンは10歳で母を亡くした後、ロシア語を忘れてしまったようだ[15]。のちに自力でロシア語を学び直し、ロシア語の通訳として壁崩壊前のソ連を何度も訪れ、文学作品をロシア語からドイツ語に翻訳し、80年代に作家として独り立ちすることとなった[16]。母語を再度獲得することで幼年期の想起が初めて可能となる。母語を介した両親との出会い直しでもある彼女の自伝的小説は、意識的な想起だけでなく、両親が生きてきたロシア世界での意思を超えた新たな出会いも用意する。母語はドイツとロシアを空間的につなげるだけでなく、現在と過去の架け橋ともなっている。

現在のウクライナの地名がロシア語ではなく、ウクライナ語読みに変更された事実を前にして、語り手の母語がウクライナ語ではなく、ロシア語であることに戸惑いを覚えざるを得ないだろう。母はイタリア系の祖母と、バルトドイツ系の流れを汲む祖父との間に生まれている。祖父はロシア貴族の言語であるフランス語だけでなく、ドイツ語、ポーランド語、英語も使いこなす。母の出自はウクライナ語 vs ロシア語という二項対立を越えた多言語世界である。ハプスブルク帝国ではなくロシア帝国下のウクライナ東南部の有産知識階級出身であり、家庭で話される言語はロシア語であったはずである。それゆえ母の姉リディアがウクライナ語を子守女から習得したというエピソードが生きてくる。

1928年に母の姉リディアはオデッサ大学に入学する。革命後、農民や労働者階級の子弟を優先する大学に、貴族の血を引いた知識階級のリディアが入学するのは不可能なはずであった。時は民族共産主義によるウクライナ化が推し進められた時期であり、リディアはウクライナ語を大学入学に利用する。「教授たちのほとんどが、革命後のウクライナでは国粋主義的大国の言語と名指しされ、不評を買っていたロシア語」しかできない。子守女からウクライナ語を習得していた「リディアは老教授の目をふてぶてしく見つめ、自分はウクライナ語しか話せないと訴える。気の毒にもこの教授は試験をウクライナ語で出題しようとして舌がもつれてしまい、リディアが何か無意味な言葉で回答すると、もちろん

---

[15]「越境作家ナターシャ・ヴォーディンとの対話」S. 322

[16] 1983年『ガラスの街』*Die gläserne Stadt* で作家としてデビュー。代表作としては『結婚』*Die Ehe*（1997）『夜の姉妹』*Nachtgeschwister*（2009）『暗闇の中のどこかで』*Irgendwo in diesem Dunkel*（2018）。最新作は『ナスチャの涙』*Nastjas Tänen*（2021）で、本作でも紹介されている語り手の友人のウクライナ女性と、ユダヤ人と結婚し、強制労働後ドイツに住み続けざるを得なかったその姉のエピソードが詳しく描かれる。またヴォーディンは作家のヴォルフガング・ヒルビッヒ Wolfgang Hilbig と婚姻関係を結んでいたこともある。

理解しようもない。十分後、教授は不安で汗みどろになりながら、リディアを最高点をつけて放免する。」（191 頁、S. 202f.）

> 講義がロシア語とウクライナ語のどちらで行われるべきか[17]については、白熱した議論がくりかえし起こる。ウクライナ語は大多数の学生、党、そしてウクライナ作家連盟の指導者に支持される。ロシア語のものはすべて何時間にもわたる長広舌で悪魔の烙印を押される。大学の玄関ホールには「大学構内ロシア語使用禁止」の大きなプラカードがぶら下げられる。ありとあらゆる言葉が話されているのに――ドイツ語、イディッシュ語、英語、フランス語、ギリシア語、イタリア語――だれもが話せて理解できるロシア語が禁止されているのだ。（195 頁、S. 206）

大学の中では誰もロシア語を話さないが、卒業パーティーでは酒の勢いもあるのか、ほとんど全員がロシア語を話し、「ウクライナの田舎出のおぼこ娘 die ukrainische Unschuld vom Lande を演じていたのが明らかに自分だけではないことに気が付く」（206 頁、S. 219）始末である。リディアの卒業証書には「文学教師の資格を有すと記載されているが、何語の文学なのか、ロシア語かウクライナ語なのかは抜け目なく触れられていなかった。」（206 頁、S. 219）卒業後はウクライナ化のおかげでロシア語をウクライナ語に訳す仕事を得ていたリディアだが、党を批判した友人とのやりとりが見つかり、政治犯としてカレリア地方の収容所に送られる。北極圏近い収容所では犯罪者の少年たちにロシア語で授業をすることで流刑を生き延び、収容所内で知り合ったロシア人の夫と結婚してそのまま流刑地に住み着いた。ロシア語と文学の教師として七十歳まで働き、モスクワ近郊で 2001 年に亡くなった。この小説で主張されるのはロシア語とウクライナ語の対立、ましてや言語の優劣などでは決してない。リディアはその場の状況に合わせて巧みに言語を利用する。言語はそこではナショナリズムや共産主義イデオロギーの道具ではない。叔母リディアだけでなく、ドイツ語を習得することでドイツ社会への参入を果たした語り手にとっても、言語は厳しい現実の中で生き延びるための戦略の一つなのである。そして母語であるロシア語を習得し直し、ドイツ語とロシア語の翻訳に携わり、ドイツ語で執筆することを通して自らのルーツを探索するヴォーディンにとって、言語とは両親との出会い直しを、自らの生に含まれる時空を超えた他者との新たな出会いを提供するものである。そこでは言語は世界への通路そのものであり、異なる時空への行き来を約束してくれる査証

---

[17] 一九二九年には一般教育の八〇％、大学の三〇％がウクライナ語のみで行われた。『物語　ウクライナの歴史　ヨーロッパ最後の大国』黒川裕次　中公新書　2022 年　207 頁

の役割を果たしている。

2.3 世界史・世界地図としての家系図

『彼女はマリウポリからやって来た』は四部構成となっている。第一部はインターネット、第二部は母の姉リディアの手記、第三部は様々な記録文書、第四部は語り手の回想と、それぞれ異なる記憶メディアを元にして物語が展開していく。また小説には7枚の写真と広範囲に渡る家系図も添付されている。第一部でおおよその家系図が出来上がり、推測でしかなかったバイオグラフィーの空白部分が第二部の手記と第三部の文書をもとにして埋められていくという仕組みである。この小説は記憶を保存、伝達する媒体そのものが一つのテーマとなっているともいえる。語り手がマリウポリを目にするテレビ映像もその一つである。それぞれの媒体は不完全なものであり、その不完全性を他の媒体が補っていく有様が描かれているのではないか。

母親の痕跡を辿る旅のきっかけを作ったのもインターネットである。インターネットがなければそもそもルーツ探しの旅は実現できなかったはずである。語り手がインターネットが普及するまで母親を探そうとしなかった理由は、90年以上前に生まれた母の痕跡を辿ることができるなどとは思ってもいなかったこともあろうが、何よりも自分の出自を「間違いのようなもの」と考え、抑圧していたからである。

> 子どものときはずっと、いつかきっと逃げ出せるようにと、ただ大人になるのを待ちわびていた。ドイツの学校から、「集合舎宅」から、両親から、わたしの血肉となり、わたしを捕えて放さない間違いのようなものから逃れたかった。たとえ両親や身内がどんな人たちだったかを知ることができたとしても、知りたいとは思わなかっただろう。興味がなかったし、そんなものはどうでもよかった。わたしとは関係のないことだった。とにかく逃げたかった、それも大急ぎで、何もかも永久に捨てて、世界のどこかでわたしを待っている自分だけの本当の人生へと、自分を引っさらっていきたかった。(28頁、S. 27)

2013年68歳になった語り手は作家となってベルリン[18]に住んでいる。「自分だけの本

[18] ヴォーディンはベルリンを故郷と呼んでいる。「ここの多様な文化、ベルリンのマルチカルチャー。ドイツ的なものなんて！ベルリンから西ドイツへ入るといつも外国に来たのだという気持ちになります。ベルリンはドイツではありません。私にとってベルリンはドイツではありません。」「ベルリンは私の故郷と呼ぶことができるでしょう。ただし西ドイツのベルリンではありません。絶対に。むしろ東ドイツのベルリンです。そこはロシアとドイツの中間みたいな場所です」と発言している。「越境作家ナターシャ・ヴォーディンとの対話」S. 328f.

当の人生」を手に入れた彼女はようやく自分の出自と向き合う心の余裕ができる。仕事の合間にインターネットで母の名を戯れに検索してみると「アゾフのギリシア人」という親類縁者を探す掲示板に辿り着く。ロシア革命で多くの者が亡命し、収容所送りになり、戦争で命を落とした。消えてしまった自分の縁者を、途絶えてしまった自分のルーツをインターネットで探す者は語り手だけではない。ちなみにこの掲示板は実在しているとのことである[19]。マリウポリとギリシアの関係についてはすでに語り手の言葉を借りて前述した。語り手は、家系図の作成を趣味とするギリシア系ウクライナ人コンスタンチンと知り合い、メールを交わし合うことで親族の歴史が次々と明らかになっていく。ソ連時代には旅行が認められず、好きに旅行ができるようになった時には貧しくてそれも叶わなかったコンスタンチンにとって、インターネットの仮想世界こそが好きな場所を自由に訪れることができる世界の代わりとなったのだと語り手は想像する。二人は家系図を「世界地図であるかのように」（57 頁、S. 58）探索する。その世界地図は、歴史の残虐さに翻弄され、各地に移動を強いられて散り散りになった親類縁者たちの移動の軌跡を表している。

インターネットは距離を無効化するだけでなく、時代をも超えていく。4 世代前の曽祖父母が生きた 19 世紀まで時代は遡る。時が過去へ遡及するとともに、空間も拡大していく。読者は、語り手が当初抱いていた雪降るロシアの地というマリウポリのイメージが、南方の多民族が暮らす国際都市へと変貌していく様をともに追うことになる。ナショナルな地図ではなく、沿海という自然の地勢に着目してみると、この都市は海上航路でギリシアやイタリアと繋がっていることを発見するはずだ。語り手は、自分の祖母がナポリ出身の船長を父に持ち、裕福な商家出身のイタリア人であることを初めて知る。革命で全てを失い、暴動で一夜にして白髪となったイタリア人の祖母は、流刑によってロシア北西部に流れ着いた娘リディアを訪ねた時にナチスドイツの侵攻が始まり、マリウポリに戻れなくなる。戦後はモスクワ近郊でリディアと暮らすことになる。行方不明となった母を恋しがりながら 36 歳の若さでドイツで亡くなった語り手の母よりも長く生きたことになる。

語り手の祖父はバルトドイツ系とウクライナ貴族の血を引くインテリであり、ボリシェビキ運動に携わり、20 年流刑になっていたこともある。母親から自分の子ではないと言われて続けてきた語り手は、初めて目にする写真を見てドイツ系の曽祖母と瓜二つであることを発見し、初めて血のつながり、「人類そのものと身体の奥底で通じ合っていると感じさせるような何か」（67 頁、S. 69）を感じる。このように書くと語り手は血のつながり

[19] Andereas Kilb: Meine Mutter, die Unberührbare. Frankfurter Allgemeine Zeitung. 18. 03. 2017. 小説の中で語り手の手助けをしてくれるコンスタンチンは実際は別名であることから、この小説は事実の報告ではなく、文学作品の一つなのだと筆者は述べている。

による家族の系譜を神聖視しているかのようであるが、決してそうではない。家系を調べるうちに、精神異常、近親相姦の噂、自殺死など受け入れ難い事実にも直面する。まだ存命中の人物も、ファザーコンプレックスを持ち続ける奇態な老婦人、現代ロシアのプロレタリアートを絵に描いたようなリディアの孫、しかも彼は自らの母を絞殺した殺人犯[20]でもある。「生まれてからずっと自分が邪険に扱われてきたと感じてきたのは、わたしに家族がいなかったからだが、それはそういうお荷物をひとつも背負っていない自分は実は幸せだということを知らなかっただけのことなのだ」（95 頁、S. 99f.）と思いもする。

血のつながりではなく、語り手が見出したつながりは、音楽に対する愛情、それも歌への情熱である。父は戦後ドイツでロシア的なものをありがたがるアメリカ占領軍に雇われ、コサック合唱団の一員となる。母を唯一憂鬱から救い出すことができるのも歌である。暴力的な父、打ちのめされた母、不健全な家族を繋げてくれる唯一のものが歌である。家族で合唱すると隣人たちは窓の下に集まってくる。歌がドイツの隣人たちとしばしの和解をもたらしてくれる。ドイツで辛い少女時代を送る語り手に生きる勇気を与えてくれたのはミュンヘン歌劇場で聞いたオペラであり、語り手の妹も後にオペラ歌手になる。ルーツ探しをしているうちに母の兄セルゲイが戦後ドイツでも舞台に立ったことのあるソ連の著名なオペラ歌手であったことが判明する。語り手は伯父セルゲイの声が録音されたレコードを手にいれる。遠い時代、遠い世界から届く声が現在の語り手の部屋の中に響き、彼女は想像の中で母の声にその兄の声を重ねて、レコードという複製技術の記憶媒体によって叶わなかった幻の合唱を実現させる。また語り手にテレフォニストとしてドイツ社会で働くきっかけを作ったのも、その声であった。家族の親密性を保証するのは、家系図で表される血の繋がりではなく、身体から発せられ、身体と共に消え去っていく声の儚さである。

2.4 Displaced Person を描く

Displaced Persons、略して DPs とは、ナチスドイツによる強制労働や追放などを理由として故郷を追われた難民のことである。DPs に関して歴史研究は以下のように証言している。「戦後のドイツ社会においては、DPs はあくまで占領問題とみなされ、ナチ支配の犠牲者としての彼らの運命は、長い間無視され、排除されていた」。[21] 語り手自身もこのように述べる。「人生の大半を、自分が強制労働者の子であることをまったく知らずに生きてきた。だれも教えてくれなかったのだ、両親も、そしてドイツ社会も、ここでは強

[20] 母を絞殺した息子を語り手が受け入れたのは、自分自身が幼い頃に母から首を絞められる経験をしたからだという解釈もある。Uli Hufen: Was kann ein Mensch ertragen? Roman „Sie kam aus Mariupol“. 26. 02. 2017. Deutschlandfunk.

[21] クラウス・J・バーデ / ヨッヘン・オルトマー「ドイツにおける移民の歴史」、135 頁

制労働という大規模な現象が記憶という文化に保存されていなかった。」（25 頁、S. 24）さらにホロコーストと比較してこうも述べている。「強制収容所の生存者は世界文学を世に出した。ホロコーストについての本は図書館に山ほどある。しかしユダヤ人以外の被害者は、強制労働による根絶を生き延びたとしても、沈黙していた。」（25 頁、S. 23）戦後のドイツ語圏文学が一貫してホロコーストの記憶を問題としてきたのに対し、スラブ人の DPs を中心テーマとして据えた作品は数少なく[22]、この小説は当事者として DPs の記憶を伝える貴重な作品である。

語り手の両親は連合軍の爆撃を受け続けるライプツィッヒで通称 ATG、「労働条件と生活環境がとりわけ非人間的なことで有名なフリック財閥」（248 頁、S. 263）の軍用機組立工場で「自分の同胞を殺しに故国に出撃する戦闘機の組み立て」（252 頁、S. 269）に携わらざるを得なくなる。語り手は ATG の記念館を訪れ、パンフレットに掲載された収容所の見取り図から母が居たバラックを突き止めようとするが、無駄に終わる。スラブ人の犠牲者はあくまで「ホロコーストの付録」ein Anhängsel des Holocaust（25 頁、S. 24）でしかないからだ。

> 二十ある ATG の収容所のうち、記録が残されているのはブーヘンヴァルト強制収容所の外部収容所だけで、そこには ATG のために働くハンガリー系ユダヤ人女性五百人が収容されていた。この収容所については膨大な資料があり、収容所の跡地には記念銘板も設置されていた。およそ二千人の、スラヴ人が大半を占める ATG のほかの強制労働者については一言も書かれておらず、彼らに捧げる記念銘板など言うまでもない。（251 頁、S. 266f.）

語り手は敷地の見取り図から母が OST の腕章をつけた「東労働者」としていかに苦役を強いられたかを想像する。彼らは人種ヒエラルキーの中でユダヤ、ロマ、シンティの次に下位に置かれていた。そしてスラブ人の中の最底辺に置かれていたのがウクライナ人である。強制労働時代を描いた小説の第三部は様々な資料をもとに強制労働の実態を想像力を駆使して再現したものである。引用される資料は、ウクライナ前線で見かけた強制労働者の移送の様子を書き留めた東ドイツの作家フランツ・フューマン Franz Fühmann からの引用、収容所内の懲罰の様を記した役人の覚書、スラブ人の子供を餓死させるか、労働

---

[22] オーストリア作家ヨーゼフ・ヴィンクラーもケルンテンの農村で強制労働に従事させられたウクライナ女性に関する作品を 83 年に出版している。Josef Winkler: Die Verschleppung. Njetotschka Iljaschenko erzählt ihre russische Kindheit. Frankfurt a. M. : Suhrkamp 1983. 2022 年に Die Ukrainerin Njetotschka Iljaschenko erzählt ihre Geschichte とタイトルを変えて新たに再版されている。和訳も存在する。ヨゼフ・ヴィンクラー『思い出のウクライナ－ある強制移送の軌跡』岩槻敬佐翻訳　同学社　2002 年

力として活用すべくいかに効率的に養育すべきかの二者択一を提案するヒムラーに宛てたヒルゲンフェルトの手紙など多岐にわたる。

ライプツィッヒ大空襲の後、ついに戦争は終結し、強制労働者は「ドイツ人と立場が逆転する。支配者が敗者になり、奴隷が勝者になる。」(268 頁、S. 286) 強制労働者は街に溢れ出し、「一晩で人間の新しい範疇が生まれた。追放流民、いわゆる難民。何百万人ものスラヴ系の無人間あるいは非人間のことだが、彼らはやがてアメリカの解放者たちからも疑惑の目を向けられることになる。アメリカ軍はスターリンと同様、ドイツ軍に協力したとの嫌疑を彼らにかけ、軍新聞『星条旗』で彼らを犯罪浮浪者ならびにファシストにしてボリシェヴィキと決めつける。」(268 頁、S. 286f.)

DPs は戦後、連合国占領軍の管轄下に置かれ、祖国への送還が始まった[23]。ソ連邦からの DPs も強制的に本国へ送還された。移民史研究によると「ソ連邦では DPs は『ナチへの協力者』とみなされ、収容所に入れられて弾圧されるか『再教育処置』を受けさせられることを、なかでも将校はしばしば死刑をも覚悟しなければならず、そのことから、少なからぬ者が移送よりも自殺を選んだ。西側当局はそのことを認識していたにもかかわらず、強制送還は行われた。」[24] 小説の語り手も同じことを述べている。「ヤルタ会談でソヴィエト国民全員の本国強制送還が決まったものの、これを歓迎したのは、疲労しきった労働者にはもはや用がなく、彼らからの復讐を恐れてもいるドイツ人だけではない。できる限り早く秩序を立て直そうとしているアメリカ人もこれを望んでいるのだ。」(268 頁、S. 287) アメリカ軍が撤退した後、ライプツィッヒはソ連占領軍下となり、「またしても両親はソヴィエト当局に追いつかれる。ドイツまでふたりを追いかけてきたのだ。」(270 頁、S. 289) 彼らは敵国協力者とみなされるであろうソ連から逃げおおせ、前述した通りニュルンベルクまで辿り着き、金属工場のドイツ人に匿われて 5 年間の潜伏生活を送ることになる。

第四部は工場の倉庫での潜伏生活、語り手が初めてドイツ語を学んだヴァルカ収容所での生活から、母が亡くなるまでの出来事が回想によって語られる。語り手の視線を通して、追い詰められ、精神的に崩壊していく母の姿が肉薄して描かれる。故郷から切り離され、ドイツ人の慈悲だけが頼りの工場の倉庫以外に世界に居場所がなくなった母の精神状態は限界に達する。「おそらくあの当時すでに、母が人生に耐えきれず、今にもそこから立ち去り、わたしの手に届かないところに行ってしまうと感じている。おそらくあのとき

---

[23] 20 ヵ国に渡る 35 言語以上の 1000 万人から 1200 万人の DPs がいた。1945 年 5 月ドイツ降伏後の 4 ヶ月間で 500 万人強の DPs が故郷へと帰還した。1945 年末にはおよそ 170 万人がドイツに残っていた。1946 年 4 月に創設された「国際難民機構 (IRO)」の出国計画以後は、ドイツに留まったものは少数であった。クラウス・J・バーデ / ヨッヘン・オルトマー「ドイツにおける移民の歴史」133, 134 頁参照

[24] 同上　134 頁

にもう役割が逆転してしまい、わたしは四歳にしてすでに母を肩に背負い、この人を失ってしまうという不安、生まれたときにすでに感じていた不安を抱えていたのかもしれない。」（289 頁、S. 308f.）

世界で唯一の居場所であった倉庫での生活もドイツ当局に見つかり、一家は米軍が管轄するヴァルカ収容所に入所させられる。戦中はナチスの党大会に利用されていたこの場所には、ナチスの高官と追放流民が、つまり加害者と被害者が同時に収容されていた。母を悩ますのは木造バラックの鼠や毒虫だけではなく、トラウマによるストレス障害を患った収容者たちの喧騒だ。

DPs がアメリカ占領軍の管轄から離れ、ドイツの難民局の管轄下に移されるに伴い[25]、ヴォーディン一家は 1952 年収容所から解放される。1951 年「故郷なき外国人の法的地位に関する法」[26] に従い、彼らは追放流民ではなくなり、「無国籍外国人」Heimatlose-Ansländer という名称で呼ばれるようになる。国籍は失うが、ドイツでの滞在許可は不必要となった。彼らは地元の住民たちに軽蔑を込めて複数形で「集合舎宅」die Häuser（302 頁、S. 323）と呼ばれる住まいに引っ越すこととなる。収容所ではロシア語を話すロシア人、ウクライナ人、他のソ連邦の人々が収容されていたが、「集合舎宅」にロシア語を解する者はいなくなる。ポーランド人、セルビア人、ルーマニア人など、互いに幾つかの単語だけしか理解し合えない言語のカオス、「東欧のバビロン」（305 頁、S. 325）で母はますます孤独を募らせていく。「集合舎宅」に移っても収容所の噂は付き纏い、一家はドイツ人から差別を受け続ける。「無国籍外国人」のドイツへの「統合」は、決して生易しいものではなかったことを歴史研究も証言している。「統合過程における DPs に対するドイツ住民の態度は、戦争直後には忌避、偏見、侮辱、さらには妬みに支配されていた。つまり、東方出身者に対する『劣等人種』というナチの蔑称が引き続き影響を与えていたことに加え、解放されたかつての強制労働者たちの暴力行為や略奪の噂が一般化し、恐怖をまき散らしていた。」[27]

一家はドイツ人から差別を受けるだけでなく、「東欧のバビロン」の中でもロシア人であるが故の差別を受けることになる。「共産主義者」、「ボリシェビキ」、「スターリン主義者」という叫び声と共に、窓ガラスに石が投げ入れられる。語り手はプロテスタントの小学校に入るが、ここでもロシア人代表として戦争未亡人やナチ党員のこどもたちからのいじめが続く。そこは語り手にとって「冥界」Tartarus でしかない。

---

[25]「一九五〇年に西側連合国が DPs に対する責任をドイツ連邦共和国に委譲したとき、彼らのうち 15 万人が西ドイツ国内にとどまり、そのうちの約三分の一が収容所で生活していた。」同上 134 頁

[26] Gesetz über die Rechtsstellung heimatloser Ausländer im Bundesgebiet.

[27] クラウス・J・バーデ / ヨッヘン・オルトマー「ドイツにおける移民の歴史」305 頁

冥界には二十三人の子どもが生息し、みんなわたしと同じように終戦前後の生まれで、生まれたときからロシア人への憎しみを身につけ、七、八歳にしてすでにロシア人は劣等人種で、とにかく世界の悪であると知っている。担任のショルン先生は金髪碧眼のゲルマン女性で、藤製の鞭を手放さず、恐るべきも打擲も惜しまず、わたしを庇護してくれるどころか、その逆だ。ロシア人の残虐行為、殺意そして凶暴性を並べたて、わたしに襲いかかるように迷うことなく同級生をけしかける。家庭ではあいかわらずナチズムの規律精神が支配し、戦後の何も話せない息苦しさのなかで子どもたちの抑圧された攻撃性の格好のはけ口がわたしなのだ。彼らはわたしに対する暴力で一時的に鬱憤を晴らす。(311 頁、S. 332)

学校だけではなく、「わたし」には家庭にも安住の場所はない。それは母も同じである。歳も離れ、家事に不慣れな妻を罵るばかりの夫との結婚生活にも居場所がない。娘二人の存在も母の生きる希望とはならず、娘に対する母の態度は残酷そのものである。死んだ演技をしてみせ、自殺を仄めかし、父と残るか自分と一緒に入水するかの選択を迫りもする。あるときは本当に縄跳び用の縄で「わたし」の首を締め付け、またある時はナイフを喉に押し当てる。

わたしの中には母の死を願う気持ちと、そのとおりのことが起こることへの不安があるが、どちらが強いのか自分でもわからない。ある日もう母を目覚めさせることができなくなるのを、あるいはいつも脅しだったことを本当に実行して入水するのを願っているのか怖れているのかわからない。夜、わたしは眠らないようにする。目が覚めたときに、もう母がいなくなっているのが怖いのだ。(315 頁、S. 336f.)

家に帰って来ない母を探す警官に全てを悟った語り手は、母がレグニッツ川に沈んでいることを告げる。母は写真を引き裂き、カレンダーに×印を付け、畳んだ外套を岸辺に残して入水した。

「もしもお前が、お母さんが見てきたものを見たなら……」(299 頁、S. 319) と母は「わたし」に語ってきた。1920 年生まれの母は、幼児期とはいえ革命前の豪奢な暮らしの記憶が残る 1911 年生まれの姉リディアとは異なり、生まれた時から貧困と飢餓、差別と暴力しか知らない。彼女は「マリウポリから」「血に飢えた二十世紀の最も暗い闇からやってきた」(50 頁、S. 51) のである。母の痕跡を辿るうちに「わたし」は母は故郷でもどこにも居場所がない Displaced Person だったのだと気が付く。

母はウクライナ世界に深く根づき、神経の隅々までつながっているとずっと思い込んでいたが、姉と同じ一族出身ゆえに、やはり弾き出された者だったのだ。ドイツでよそ者として暮らしたことは、母にとってたぶん新しい経験ではなく、これまで味わってきたことの延長だった。わたしはこれまでずっと間違ったイメージを抱いていた。母は故郷を喪失したのではなく、初めから故郷などなかったのであり、生まれた時からもう追放流民だった。(186 頁、S. 197)

「血に飢えた二十世紀の最も暗い闇」は彼女のような生まれながらの故郷喪失者、追放流民を生み出した。しかしながらその闇にようやく光が差し始め、DPs という呼称からも自由になった今、なぜ自ら死を選ばねなかったのか。他者から強制された死ではなく、自ら死を選び取ることに自由と解放を見出したのか。母の自死の謎は深まるばかりである。この小説が示すのは、家系図や様々な記憶媒体によってもとらえることができず、そこから滑り落ちていく母の心の暗部である。それは父の痕跡を辿る『暗闇の中のどこかで』にも当てはまる。母同様に Displaced Person であった父をせめて最後にこの世界に留めようと語り手は棺に横たわる父の亡骸を写真に収める。現像すると写真は真っ黒で、小説は「フィルムは空であった」という言葉で終わっている。両親は Displaces Person として、記憶メディアによって捉えられ、固定されるのを最後まで拒むのである。彼らの存在の核心は空白のままに留め置かれる。この空白こそがヴォーディンの創作活動の原動力である。ヴォーディンはこの吸引力を持つ真空に極限まで近づき、その周りを巡って物語を紡ぎ出していく。

3. 家族史という「物語」の復活

「想起の文化」は現代ドイツを特徴づけるキーワードである。ナチズムという負の過去の想起と反省が文化のあらゆる面に及んでいる。もちろん文学も例外ではない。しかしながらその「想起」のあり方は時代によって異なっている。当事者としてナチズムの暴力を被った世代の作家、例えばパウル・ツェランやイルゼ・アイヒンガー、インゲボルク・バッハマンなどは生々しいトラウマを抱え、誰もが理解できるようなわかりやすい「物語」を紡ぐことは不可能であった。「アウシュヴィッツの後に詩を書くことは野蛮である」とのアドルノの言葉が示す通り、破局の体験を言語によって表象できるか否かが問題となる。想起と表現のあり方は、沈黙へと落ち込みながら中断と飛躍を余儀なくされ、筋を保った物語の展開は不可能である。戦後生まれの 68 年世代は、学生運動からも明らかなように、前世代への断罪と系譜的な連鎖の断絶を主張することになる。それに応じて 70 年代、80 年代に流行した「父親文学」においては父からの離反がテーマとなる。この「父親文学」に代わり、90 年代から三世代に渡る「家族小説」が活況を博し、それは現在に至るまで続

いている。「想起の文化」研究の第一人者であるアライダ・アスマンによると「父親文学では、個人主義や断絶を特徴とした―テーマの中心は、父親との対立、論争、清算だった―のに対して、家族小説はむしろ連続性を特徴とする。家族小説では、みずからの自我をより大きな家族の脈絡、歴史の脈絡に統合させることが問題となる」[28]。現代の「家族小説」は、家族史がそのまま世界史となっている。戦争を直接体験していない世代は、様々な記憶媒体を介して過去の歴史を再現し、大戦の記憶を祖父母の世代に代弁させる。現在の三世代に渡る「家族小説」ブームの背景には、戦争を体験した当事者たちがじきに不在となるという時代の要請もあるに違いない。戦後生まれのヴォーディンの作品も記憶メディアを介した媒介的な歴史の再現を特徴とする「家族小説」[29] に属するものである。しかしながら彼女の「家族小説」は、負の歴史を反省し、記憶するという目的のために描かれている訳ではない。淡々とした語り口は告発や断罪からは程遠い。「血に飢えた二十世紀の最も暗い闇」を追い求めているのではなく、自らの出自に言語という光を当ててみると、暗闇が浮かび上がり、それは暗すぎて見通せない闇のままに留め置かれている。

「家族小説」はまた移民文学でも隆盛を極めている [30]。ドイツ語を母語並みに習得した後にドイツ語で創作する「移民の背景」を持つ作家たちが、自らの出自を振り返り、語り始めるのは必然的な流れであろう。ヴォーディンはインタビューで作家は全て「世界の中にきちんと存在していないと感じているからこそ、語りを通して何とか世界の中へ入っていこうとする意志」を有しており、その意味で「全ての作家は移民である」と述べている [31] が、ヴォーディン自身は、世界の中で安住できないとはいえ、それでもルーツを持つ「移民」というよりも、生を受けた時点ですでに世界から切り離され、疎外された Displaced Person であったのであり、「語りを通して世界の中へと入っていこうとする意志」は格別に強いことが作品に表れている。

---

[28] アライダ・アスマン『記憶のなかの歴史―個人的記憶から公的演出へ』Geschichte im Gedächtnis. Von der individuellen Erfahrung zur öffentlichen Inszenierung. 磯崎康太郎訳　松籟社　2011 年　117 頁

[29]「家族小説の場合、テキストは、熱心な調査によって集められ、家族の記録集やそのほかの文書からなる資料が散りばめられている。複数の声や性質の異なるテキストのこうした混淆は、新しい文学的要素となり、家族小説を、フィクションと記録との明瞭な区別が無効となった混成的なジャンルに変える。一人称の語り手の役割は、父親文学では強い差異化への意志によって規定されていたが、家族小説ではむしろ、探し求め、苦しみ、解き明かし、学習する人物として描かれる。」同上、118 頁

[30] 例として以下の作品が挙げられる。ボスニア出身のサーシャ・スタニシチ『出自』Saša Stanišić, *Herkunft*、ブルガリアのイリヤ・トロヤノフ『世界は大きく、救済は至るところに潜んでいる』Ilija Trojanow, *Die Welt ist groß und Rettung lauert überall*、スロヴェニアのマヤ・ハーダーラップ『忘却の天使』Maja Haderlap, *Engel des Vergessens*.

[31]「越境作家ナターシャ・ヴォーディンとの対話」土屋勝彦